

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520829

研究課題名(和文) ビザンツ中期の修道院ネットワーク

研究課題名(英文) Network of Monasteries in the Middle Era of the Byzantine Empire

## 研究代表者

根津 由喜夫 (Nezu, Yukio)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：50202247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、これまで実証的な分析がなされてこなかったビザンツ中期(10-12世紀)における修道院のネットワークの実態を解明することである。中央の皇帝権力と密接に結び付いた大修道院が地域社会に及ぼした政治、文化、経済的影響力の実像を究明するのが第1の課題である。同様に、皇帝が、資金や技術を援助して他国に教会・修道院を造営させた場合にはそれらの施設が現地におけるビザンツの文化的ヘゲモニーの装置として機能したことが想定される。これらの課題を実証的に解明するため、グルジア、ギリシア、マケドニア、アルバニア、ルーマニアにおいて現地調査が実施され、データ収集が行われ、目下、分析作業が進められている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to explicate the actual characters of the network of Byzantine monasteries in the 10-12th Centuries. This subject was not dealt earnestly until today. Firstly, we try to illuminate the political, cultural and economical influence of great monasteries tied to imperial power on local communities. Similarly, monasteries constructed or financed by Byzantine emperors in foreign lands also seem to play the role of device of the byzantine cultural hegemony. Field works in Georgia, Greece, Macedonia, Albania and Romania were carried out for elucidating these points substantially and basic data were collected yet. Now, analyzing work is pushed forward.

研究分野：西洋史

キーワード：ビザンツ 修道院 東方正教

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点は、過去の科研費に基づいて実施された東地中海沿岸地域での現地調査で得られた複数の体験に発している。それは、皇帝政府、ないし帝都コンスタンティノープルと関係の深い大修道院が、中央の最新の造形上の技法や様式を地域社会に伝え、それを、中小の現地の教会、修道院などの施設が、おそらくは地元の技術者集団を用いて模倣、再現しようとする現象である。そうした現象は、たとえば、応募者が先にビザンツ皇帝の権威の背後にある靈性の究明を試みた研究(平成21年度～平成23年度 科研費・基盤C)でトルコ、カッパドキア地方の調査旅行を実施した際、ギョレメのトカリ・キリセ教会とチャブシンの「大鳩舎」教会の壁画において確認される。トカリ・キリセ教会は、高位の軍司令官を輩出したフォーカス家の構成員によって造営され、その内部装飾には首都から招来した画工が従事したと考えられるのだが、そこで描かれた「聖霊降臨」の主題が、「大鳩舎」教会において、明らかに稚拙な別の画工によって模写されているのである。

同様の事例は、エーゲ海東部キオス島でも確認できる。11世紀中葉に皇帝コンスタンティノス9世モノマコスの全面的な支援で建立されたネア・モニ修道院が、その後の同島の教会建築のモデルとなり、これに続く時期に建立されたパナギア・クリナ教会や同島ピルギの聖使徒教会に明らかな模倣と継承の意図が認められるのである。また、マケドニア共和国スコピエ郊外に現存するネレズィの聖パンテレイモン教会(本来は修道院の主聖堂だった)のような、辺境の地にビザンツ皇族が建立した施設も、建立者自身の家系が現地に定着しておらず、帝都に復帰した公算が大きいことを鑑みれば、中央貴族の在地化の拠点というより、中央文化の発信基地と想定した方が分かりやすい。

12世紀後半以降、バルカン西部地域では、ビザンツ第2の都市テサロニケ出身の画工集団が各地を移動しながら複数の教会施設に壁画を残していることが知られているが、

そうした彼らの活動も、当時のバルカン地域の政治情勢、たとえばビザンツとセルビア、および両勢力に挟まれたテッサリアのヴラフ人など、中小の地域権力との相関関係の間に位置づけてみると、画工集団を一種の文化大使として送り出したビザンツ当局の政治的思惑をそこに読み取ることが可能になることも考えられる。私はかつて、ビザンツ帝国における多民族共生のメカニズムを考察したことがあるが(平成12年度～平成14年度 科研費・基盤C)、こうしたビザンツ側の文化政策をも視野に収めると、従来の政治過程論や外交関係史からは十分に解き明かされることのなかった多様な民族集団の混住地域における文化活動の波及過程とその政治的背景を浮かび上がらせることができるのではないかと考えられるのである

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで実証的な分析がなされてこなかったビザンツ中期(10-12世紀)における修道院のネットワークの実態を解明することである。具体的には、中央の皇帝権力と密接に結び付いた大修道院が地域社会に及ぼした政治、文化、経済的影響力の実像を究明するのが第1の課題である。同様に、皇帝が、資金や技術を援助して他国に教会・修道院を造営させた場合にはそれらの施設が現地におけるビザンツの文化的ヘゲモニーの装置として機能したことが想定される。本研究は、文献史学と図像的研究の両面から、この課題に取り組むことを目指している。

### 3. 研究の方法

本研究においては、皇帝やビザンツ中央権力が設立した修道院と周辺に成立した中小の在地系施設との関係を検証し、そこからビザンツ支配システムのメカニズムを明らかにするために以下の2つの方法を採用することを計画した。まず、第1は考察の対象地域に現地調査を行い、中央権力が設立した修道院と、それに続く時期、その周囲に成立した中小の在地系修道院・宗教施設と

の相互関係を検証し、建築様式、装飾技法の模倣、継承過程を確認すると共に、それを地域のトポグラフィに位置づける作業を行う。次に、こうした作業と並行して、当該地域の史料を渉猟、精査して、それぞれの宗教施設が地域社会に占めていた役割の確定に努めたい。とりわけ現地に残る碑文史料の活用は重要な課題となる。

#### 4. 研究成果

この課題を究明するために、2012年から14年にかけて主として夏季休暇期間中に3回にわたり、海外調査旅行を実行した。以下では、調査内容を報告し、そこで得られた成果について概要を述べることにしたい。

##### (1) 2012年度

本年度は、当初の計画を一部、変更し、中世初頭のローマにおける教会調査とグルジアにおける古代末期・中世のキリスト教史蹟の調査を主体として実施した。ローマについては、ビザンツ帝国と政治的關係が密接で、ギリシア系の教皇が多く輩出した6 - 8世紀の教会を訪ね、それらに残されたフレスコ画やモザイクを調査し、ビザンツとの文化的交流の実態を検証することが試みられた。

他方、キリスト教古代末期にキリスト教を受容したグルジア王国は、ビザンツ教会文化圏に包摂されるものの、長い独立教会の伝統を誇っていたため、ビザンツ文化を一方的に受容するばかりでなく、両者の間には双方向的な交流と衝突があったことが想定された。グルジアの旧都ムツヘタのジュバリ修道院とサムタヴロ修道院、なканずく王国西部の首都クタイシのモツァメタ教会(11世紀)、ゲラティ修道院(12世紀初頭)など内部にフレスコ壁画が現存する幾つかの教会や山間部に点在する中小の修道院、さらには主要な3つの洞窟修道院・都市集落遺跡であるダヴィド・ガラジュ、

ウブリスツィへ、ヴァルジアなどを訪問し、首都トビリシのグルジア国立博物館では当該時期の宗教美術作品を実見し、博物館付属のブックショップで貴重な文献も入手できた。これらの成果に基づき、これらと同時代のビザンツのそれとの比較分析が可能であり、そこから両者の相互関係、それらの壁画に込められた君主権力の政治的メッセージのあり方を探求することが可能となることが期待されるが、この点は期間中に成果を公刊するには至らなかった。

##### (2) 2013年度

2013年度は、当初は26年度に実施することを予定していたマケドニア共和国への調査旅行を前倒しで実施し、あわせて隣接するアルバニアのビザンツ・中世史蹟への調査も実行することができた。マケドニア共和国に関してはスコピエ周辺とオフリド周辺に調査を実施し、前者ではネレツィのパンテレイモン教会、スコピエ郊外の聖アンデレ教会、聖ニケタス教会、聖マルコ修道院など、12世紀から14-15世紀の教会・修道院を訪れ、後者ではオフリド市内の聖ソフィア聖堂、聖母ペリブレプトス教会のほか、クルヴィノヴォの聖ジョルジェ教会などを訪れ、調査を実施、あわせて文献資料の渉猟、取得にも従事した。これに加え、プリレブ周辺でも聖ミカエル修道院、トレスケヴェチ修道院、ヴァロシュの聖ニコラス教会を調査することができた。



聖ヨハネ・カネオ教会（オフリド・マケドニア共和国）

他方、アルバニアでは、デュラス、アポロニア、ベラティ、エルパサンなどで調査を実施し、古代末期～中世後期の教会施設や都市史蹟について多くの情報を集めることができた。これに加え、本年度の成果としては、25年6月に刊行された『ビザンツ：交流と共生の千年帝国』（昭和堂）では共同編集を務め、6章「11世紀後半のドナウ流域地方―ペチェネグ人との共生空間―」を執筆している。

(3) 2014 年度

本年度は、当初、計画していたウクライナへの調査旅行を同地の情勢悪化に伴って断念し、それに代わって、ハンガリー、ルーマニア、ギリシア3か国への調査を実施した。

ハンガリーでは、ブダペスト国立歴史博物館においてビザンツ帝国と中世ハンガリー王国の外交・文化的交流を伝える歴史遺産を調査した。特に、11世紀半ばにビザンツ皇帝コンスタンティノス9世モノマコスがハンガリー王に贈与したとされるエナメル王冠や、12世紀に一時、ビザンツ皇帝マヌエル1世の養子となり、その後、帰国してハンガリー王に即位したゲーザ3世の墓所の副葬品を実見できたことは収穫だった。ルーマニアでは、16世紀モルダヴィア王国時代に建立された代表的な修道院(アルボル、スチャヴィッツァ、モルドヴィッツァ、ヴォロネズ、フモル)を巡り、オスマン帝国の脅威が迫る時代に終末の予感に襲われつつ黙示録の世界を描き出した同地の修道院壁画の実相を調査することができた。

次いでギリシアでは、ホシオス・ルカス修道院とアテネ郊外のダフネ修道院、ペロ

ポネソス半島ミストラ遺跡の教会群を訪ねている。ホシオス・ルカスとミストラについては、所期の目的を達することができたが、ダフネについては長期にわたる修復作業が終わっておらず、かろうじて内部の拝観はできたものの、十分な調査活動はできなかったことが遺憾である。



スチャヴィッツァ修道院外観  
(ルーマニア・モルダヴィア地方)

以上、総じて現地の史蹟調査に関しては所期の目的は達せられたと考えられるが、収集した文献の読解、分析については期間中に終結させることができず、それぞれの地域における修道院群の相互関係を明確にするという課題については十分、検証するに至らなかった。これらの課題については、今後も引き続き検証を進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

服部良久・根津由喜夫他、ミネルヴァ書房、『コミュニケーションから読む中近世

ヨーロッパ史 紛争と秩序のタペストリ  
ー』、2015 (刊行確定) 128-148

井上浩一・根津由喜夫 編、昭和堂、  
『ビザンツ: 交流と共生の千年帝国』、2013、  
147-167

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

根津 由喜夫 (NEZU, Yukio )  
金沢大学 ・ 歴史言語文化学系 ・ 教授  
研究者番号：50202247

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：